

'95 Swiss Alps — ハイジの国へ —

- ◇ 期 間 1995年8月3日～12日
- ◇ 山 域 ベルナー・オーバーラント、ヴァリス
- ◇ 日 程
- 8/3 名古屋 ⇒ 香港 ⇒ <三浦Fa> シカゴ ⇒
- 8/4 ⇒ チューリッヒ ⇒ グリンデルワルト(G.W) ⇒ クライネ・シャイデック(KLS)
- 8/5 KLS ⇒ ユングフラウ・ヨッホ(往復) ⇒ アイガー・グレッチャー ⇒ KLS ⇒ G.W
- 8/6 G.W ⇒ フィルスト ⇒ バッハアルプゼー ⇒ フィルスト ⇒ G.W
- 8/7 G.W ⇒ カンデルシュテーク ⇒ エッシネン湖 ⇒ カンデルシュテーク ⇒
テッシュ ⇒ ツェルマット ⇒ ゴルナーグラート
- 8/8 ゴルナーグラート ⇒ シュトックホルン ⇒ ゴルナーグラート ⇒ リフェルゼ ⇒
グリュンゼ ⇒ フィンデルン ⇒ ツェルマット
- 8/9 ツェルマット ⇒ クラインマッターホルン
⇒ (A) ブライトホルン(往復) ⇒ ツェルマット
⇒ (B) シュバルツゼー ⇒ ツムット ⇒ ツェルマット
- 8/10 ツェルマット ⇒ テッシュ ⇒ ベルン
- 8/11 ベルン ⇒ チューリッヒ ⇒ <三浦Fa> シカゴ
- 8/12 ⇒ 香港 ⇒ 名古屋

◇ 参加者

小倉Fa [龍彦、恵、千枝(14)、穂高(11)]
箕浦Fa [浩三、留美子、愛(15)、浩文(12)]
鮫島Fa [訓子、暁(13)、萌(10)]
掛布Fa [宗義、幸子、奈美(15)、健悟(13)、みゆき(8)]
前田Fa [学、真澄、華奈(10)、汐美(8)]
三浦Fa [昭悟、敬子、和久(10)]
小林 万貴子
成田 典子(会外)

PROLOGUE

91年の「玉山」から3年が過ぎ、2年後の25周年には又どこかへ...。などと思い始めたとき、ふと大事なことに気がつく。その2年後は千枝の高校受験の年であることに。我が家の25周年はあきらめか...。と一時は思った。がすぐに簡単な方法に気がついた。都合の良い年にうちだけで行けば良いのだ！！

ちょうどそんな時、村瀬実氏より電話があった。「ヨーロッパ・アルプス」に行かないか！と。その言葉に強く動かされた私は、熟考の末、受験の前の年にヨーロッパに行くことを決断した。それから話はズンズン進み始めた。ちょっと遠いところだけど、一応みんなにも声をかけてみたら、アメリカの三浦さんも名乗りを上げ、総勢25人も集まってしまった。(予想外) ファミリー一部夏期合宿“ヨーロッパ編”の始まりである。

当初、「モン・ブラン」をイメージしながら計画を進めていたが、子供の技術、体力を考えるとやはり難しいことが解ってくる。次に候補にあげたのが「ユングフラウ」と「メンヒ」。後者の“南東稜”あたりが何とかなりそうである。しかし「メンヒ」よりも高度があって、しかも技術的にも易しい山があることを発見する。「ブライトホルン」(4,164m)である。アルパイン・ツアー社を通して、地元登山ガイドの受け入れを確認していただいたところ、“小学生”を含むパーティーに対して「歓迎はしない」が「拒否」もしないという返事であった。ほぼ気持ちは固まった。

これから先は、「玉山」でもお世話になったアルパイン・ツアーの大島さんと連絡を取りながら、参加者のミーティングや説明会を重ね、約1年間かけて内容を詰めていった。

残念ながら村瀬Faは不参加となってしまったが、前田Faが新たに加わった。そして各Faは“資金作り” & “休暇獲得闘争”に日々明け暮れてゆくのであった。

もうすぐハイジやペーター、そしてヨーゼフが駆け回った山々に会える...!! そんな気持ちの高ぶりがピークに達し始めた出発直前、しかも出発前日および当日にかけて、小林マキちゃんから「行けないかもしれない！」そして掛布氏より「みゆきの調子が悪い、今から病院に行く。」ガガーン!! 「オネガイ、ユルシテ!!」と思わず叫びそうになったが、この“事件”も幸いクリアする事ができ、1995年8月3日、三浦Faを除く22名全員無事、名古屋国際空港に集合する運びとなった。

出発!

8月3日(木) 晴/雨

村瀬Fa、加藤氏、鮫島父らの見送りを受け、定刻より少し遅れて4時過ぎに名古屋空港を飛び立つ。小林、成田以外は初めてのヨーロッパであるからして、どの顔も期待に満ち満ちているが、私は相も変わらず飛行機の恐怖に怯えていた。座席は各家族散らばったが、水平飛行に入る頃になると“男子”はさっそく徒党を組み、機内を歩き回り始める。空港より同乗したツアー・リーダーの中村さんより、香港での注意事項を聞く。

<19:00> 香港着。あいにくの雨だが、夜景が美しい。乗り換えの飛行機の出発まで、4時間の待ち時間がある。自動小銃を持った警察官に“外国”を感じる。

<23:30> 香港発。いよいよスイスに向けて飛び立つ。約14時間のフライトである。時差調整のため、なるべく寝ないように頑張ってみるが、ビールの酔いが心地よく体を包んでしまう。

ハイジの国へ

8月4日(金) 晴

<7:05> チューリッヒ着。やはりというか、さすがというか周りが緑いっぱいの牧歌情緒あふれる飛行場である。ついにやって来てしまった！「ハイジ」の国へ.....。

入国手続きを済ませ、空港内の両替所で各家族、汗と苦勞でふくらんだ財布の中の日本円を両替する。「6ヶ国語」片手に、「ビッテ、ヴェクセルン ズィー ミーア...」なんてカッコ良く決めてみようと思ったが、みんなニッコリ現金差し出し、「チェンジ プリーズ」「スモール(小銭) プリーズ」で事足りているようだ。

三浦Faが乗ってくるはずの飛行機が“ハリケーン”のため1時間ほど遅れるということで、我々はその時間を利用して、チャーターバスの運転手さんの案内で、市内観光に出かけることになった。市内の要所をバスでめぐり、チューリッヒ湖を訪れる。水は思ったほどきれいでない。陽気なイタリア人観光客が賑やかに我々のそばを通り過ぎる。(ああ、ここはヨーロッパなんだ...)

空港に戻り、三浦Faを待つ。しばらくすると、ガラスドアの向こうに懐かしい顔が見えてくる。再会の喜びもそこそこにバスに乗り込む。

このバスの運転手さんは「ヨーデル」の達人で、その素晴らしい声を我々に披露してくれる。窓の外に映し出される広大な牧草地と、色鮮やかな花が窓際に飾られたオモチャの様な家々を眺めながら、心地よいヨーデルに耳を傾ける。

途中、ルツェルンという街を訪れ、「ライオン記念碑」と「カペル橋」を見学する。カペル橋の脇にあった果物の露天商で、さっそく奥さんたちが何種類の「Berry」を買い込んできて、バスの中で試食会を行う。



カペル橋



アーレ・シュルフト

この後、マイリンゲンにある「アーレ・シュルフト」と呼ばれる、急流が岩を垂直に侵食して生まれた、「下の廊下」に似た結構迫力のある渓谷を訪れた。断崖絶壁に取り付けられた1m程の板張りの歩道を30分位かけて歩く。終点近くにあるレストランで昼食にする。特大のソーセージは限りなくビールに良く合う。

<裏話その1>

初日、「アーレ・シュルフト」見物の後のレストランにて。
みんなメニューをのぞき込みながら、“Bier”以外はよく理解できなくて、なかなか注文の料理が決まらず、あれやこれやともめていたところ、待ちくたびれたウェイトレスのお姉さんがやってきて、注文を促す。突如箕浦父、お姉さんに向かって「ちょっと、たんま！」
ウェイトレス「チョト タンマー？」

このあと運転手さんの実家(酪農家)を見学という、ハプニング & オブショナルツアーも体験する。ブリエンツ湖畔のお土産屋さんをのぞいた後、ようやくグリンデルワルトに到着する。これが「スイス」だ！といったような風景が目の前に広がる。しかし観光客もかなり多い。(特に日本人) 明日宿泊する予定のホテルに大きな荷物を預け、登山鉄道でクライネ・シャイデックに向かう。「ヨーデル運ちゃん」ともここでお別れ。記念に日本のテレカをプレゼントする。

急勾配の線路をゆっくりと電車は登ってゆく。「アイガー」が近づいてくると、親達はみんな身を乗り出して「北壁」を探そうとするが、あいにくガスに包まれてその基部しか望むことができない。

まもなく電車は終点の駅に到着し、駅のすぐ傍にあるホテル「シャイデック」に向かう。外観はロジ風のシャレた感じだが、中は結構古く伝統的な重々しささを感じるホテルである。夕食は「ユングフラウ」が一望できるレストランでコース料理が出てくる。ともかくみんなで「カンパーイ！」ビールが美味しいのが何よりも嬉しい。

日本より緯度が高いため、夜9時になっても外はまだ明るい。アイガーの懷に抱かれ、カウベルの響きを子守唄に、至福の第一夜を迎える。

<裏話その2>

ホテル「シャイデック」の小倉父と穂高のバスルームにて。
このホテルは伝統的である所以に、その設備もかなり旧式で、バスルームにシャワーが無い。2人浴槽で体を洗い、お湯が泡だらけになってからそれに気がついた。仕方なく元栓を抜き、泡のお湯がなくなるまで2人裸のまま身を寄せ合ってジッと耐えていた。(確か台北でも...)
穂高「このホテルの風呂は寒い！」

ユングフラウ・ヨッホ

8月5日(土) 快晴

ホテル前の駅からさらに上に向かう登山電車で「ユングフラウ・ヨッホ」をめざす。体調不良の掛布みゆきとその母、ここが2度目の成田の3名がホテルに残り、22名が電車に乗り込む。

どんどん高度を上げる電車はまもなくトンネルに入る。ここから終点まで約7km暗闇の中である。このトンネルの途中の、標高 2,864mにある「アイガー・ヴァント」は北壁の真ん中に開けられた“窓”で、ガラス越しに垂直の岩壁とクライネ・シャイデックが見下ろせる。さらに 3,158mの窓「アイスメア」は広大な氷河と万年雪の世界である。

ここからしばらく行くと電車は終点のユングフラウ・ヨッホに到着する。エレベーターで展望台「ス

フィクス」に向かう。目前に「メンヒ」が迫り、足元には「アレッチ氷河」が広がる。空は紺碧そのものである。いつも冷静沈着な掛布父の口から絶賛の言葉が飛び出す。

展望台をあとにして、トンネルから雪原に出る。親達は雲表の別天地に心奪われているが、子供達は「貸しスキー」がやりたいと騒ぎ出す。親子の一悶着があったが何とか收拾がつき、子供達はツアー・リーダーの中村さんと氷の宮殿「アイスパレス」へ。親達は緩やかな大雪原を40分ほど登って「オーバ・メンヒ・ヨッホ(3,626m)」に出る。アイガーの裏側に広がる山々が一望できる。三浦さんがザックの中から缶ビールを取り出し、みんなで回し飲む。思いがけない幸せにチョッピリひたる。



オーバ・メンヒ・ヨッホ



アイガー・グレッチャー駅

ヨッホをあとに再び電車に乗り下山にかかる。トンネルを抜けたところにある駅「アイガー・グレッチャー」で途中下車し、ここからクライネ・シャイデック経由でグリンデルワルトまで歩く予定だ。

氷河の末端を間近に眺めて、ピークは過ぎたといっても、足元になお咲き乱れるお花畑の中を、ノンビリ、ノンビリ下って行く。クライネ・シャイデックのレストランで昼食を済ませ、アイガー北壁を右手に望みながら、グリンデルワルトへの長い道程を下りにかかる。アルペン・ローゼが時折その姿を見せてくれる。途中、アルピグレンの近くの茶店で休憩をとる。下りばかりの道はけっこう、足にきつく、グリンデルワルトに着く頃には、膝が情けないくらいガタガタになっていた。

<裏話その3>

2日目、クライネ・シャイデックからグリンデルワルトへのハイクも終わりに近づき、みんなバテバテになりかけた頃、小林マキちゃん、何を思ったか急に後ろ向きになって歩き出す。本人曰く「このほうが楽に下れるヨー。」

これに見習って他の女性方も後ろ向きに歩き出す。この異様な光景を、道脇の茶店のテラスで眺めていた外国の女性ハイカーが声をかける。「Good Luck !!」

ホテルに向かう途中、偶然にも熱田労山の中村さん(峠の中村さんの実弟)夫妻に会うことができた。マッターホルンを登頂して、今日からこちらで岩登りを楽しむとのことだ。

スポーツ用品店でEPIカートリッジを購入してホテルに入る。教会の隣に位置し、ヴェッター・ホルンが窓から見上げるように望めるなかなかのホテルだ。食事も部屋も三ツ星だけあって十分満足なのだが、少し贅沢すぎる気もする。もっと山小屋風の素朴なところでも良いのだが...。でもたまにはいっか！と納得させて、フカフカのベッドにヨレヨレの体を横たえる。

バッハアルプ・ゼー

8月6日(日) 曇／小雨／曇

パン嫌いの穂高が、思わず2ヶ、3ヶと口に入れてしまうほど美味しいパンの朝食を済ませ、今日も不調のみゆきと母を残し、23名でホテルを出る。

5分ほどで、フィルストに向かうゴンドラの駅に着く。御岳ロープウェイのと同じくらいのゴンドラである。全長4kmあまりを30分位かけて上がる。足元には、冬にはスキー場となる緑の牧草地が広がり、やや曇り気味だが、ヴェッターホルンやシュレックホルンのパノラマが開けてくる。フィルストの駅の売店でランチを若干仕入れ、山上湖バッハアルプ・ゼーに向けて歩き出す。ほとんど平坦な道なので、足元に咲き乱れる高山植物につい目を奪われ、カメラやビデオのフル稼働が始まる。キンポウゲやキキョウに似た花を見つけると、つい嬉しくなってしまう。

1時間ほどでバッハアルプ・ゼーに着く。ときおり小雨もパラついたが、湖のほとりにある岩小屋の脇で、各家族思い思いの昼食をとる。EPIの音を聞くと、何故かホツとする。そして自分たちが山屋さんであった事を再認識する。

今日はこのあとファウルホルンまで足を延ばす予定であったが、天候がイマイチなのと、昨日の疲れが皆まだ取れきっていないようなので、これをキャンセルし、往路を戻ることにする。

帰路、犬を連れた地元の老婦人が、女性たちに向かって「アリガト、フジヤーマ！」と声を掛けてきて、そのあと会話が出来たかどうか分からないが、一緒にカメラに収まっていた。

フィルストの駅に着く頃には天気も良くなり、展望レストランのテラスで、心ゆくまでベルナー・オーバーラントの山々を眺めながら、冷たいビールのグラスを傾ける。



地元の老婦人と

再び Gondola でグリンデルワルトに戻り、夕食までかなり時間があるのでフリータイムとする。男の子達は三浦父と公園のミニパターゴルフ。女の子と親達はショッピングと思いきいの時間を過ごす。

この日の夜、体調が芳しくなかった掛布みゆきがさらに悪い状態になり、ツアー・リーダーの中村さんに相談して、地元のお医者さんに診てもらうことになった。処方が良かったのか、お医者さんがみゆき好みの素敵な人だったのかは定かでないが、この後みゆきは、体も心もグングン良くなっていったのであった。

エッシネン湖

8月7日(月) 雲／晴／曇(小雨)

ホテル前からチャーターバスに乗り込む。グリンデルワルトを後にし、インターラーケンを経て、右手にトゥーン湖畔を眺めながらバスは進んでゆく。曇り気味の空が、カンデルシュテークに着く頃にはすっかり晴れ上がってくる。ここから二人乗りのリフトに乗り、樹林の中を上がってゆく。しばらくするとブリュムリス・アルプの山並みはその姿を現す。私は三浦母と同乗し、つい先月行って来たばかりというカナディアン・ロッキーの話に耳を傾ける。

リフトの駅からは、良く整備された小道を、周囲の山々の展望を楽しみながら歩いてゆく。道の途中には、放牧された牛たちがのんびり日なたぼっこしていて、カウベルの音が山々に響きわたっている。

<裏話その4>

どこへ行っても親達は、感動、感動の連続で、スイスの山々に酔いしれていたが、我が“Boys”はどこへ行っても“下ネタ”のオンパレード。

エッシネン湖へのハイクの途中、放牧牛が排泄したばかりのやわらかい“糞”を見て、さっそくカン君に「下痢便」は英語でなんというか聞き出している。カン君すかさず「スティンキー メロテード プープ」と答える。

おそらく普通の辞書には載っていない言葉であろう。

これ以来、牛の“糞”を見るたびに Boysは、この言葉を声を張り上げて唱和し始める。

すれ違うハイカーの中にアメリカ人がいたら... .と思うと Oh my god !

しかし、今日もスイスの澄んだ青い空の下、カウベルの音色とともに響きわたる少年達の声。

「スティンキー メロテード プープ !! 」

<裏話その5>

素朴な少年達と打って変って、中学、高校の少女達は、どこへ行っても“オトコ”の品定め。ちょっと美形の外人青年を見つけると、「ヒソヒソ、ヒソヒソ」

「もっと花や景色を見んかい！」

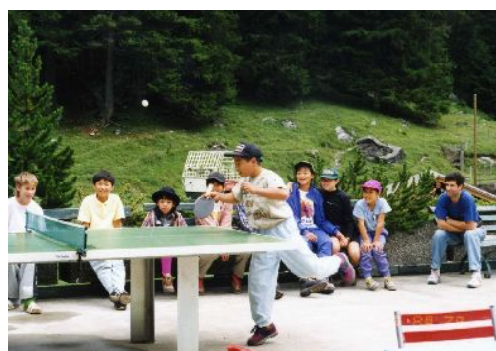
と心で叫ぶ父親は、“Nice body”のハイカーギャルとすれ違うと、目をギョウザにして振り返る。

30分ほど歩くと、目的のエッシェン湖に到着する。三方を山に囲まれて静かに水をたたえ、目前に迫るブリュームリス・アルプ連峰にかかる氷河から、幾つもの細流が注ぎ込んでいる。まさに絵画的な美しさを見せる山上の湖である。

湖畔にあるレストランのテラスで昼食をとり、グラスのビールを傾けながら、しばしその神秘的な美しさを満喫する。美しいといえば、このレストランの若奥さんもなかなかの美人で、ビールがまわっているせいもあって、隣に自分の奥さんが座っているにもかかわらず、思わず「美しい！」と口走ってしまう。



日向ぼっこする放牧牛



国際親善卓球大会

何やら子供達の歓声がするのでそちらに行ってみると、先ほどの奥さんの息子と思われる小学生らしいの兄弟と、我が日本男子たちの国際親善卓球大会の真っ最中であつた。兄弟はどちらも上手く、男子達はなかなか歯が立たない。これを見かねた三浦父が果敢に挑戦するが、女の子達が兄弟の声援にまわっていることもあって、なかなか実力を発揮することが出来なかつた。

湖を後にしてリフトの駅に着いたとき、駅の裏手に、ソリでジェットコースターのように滑り降りるちょっとおもしろそうな遊具施設あつた。当然のことながら子供達は「やりたい！」と騒ぎ出すが、時間の関係でボツとなつた。ユングフラウ・ヨッホでのスキーの件でもそうであつたが、子供達の「せっかくスイスに来たのに...」と、親達の「スイスにまで来て...」の激しい葛藤があつた。

カandelシュテークから再びバスに乗る。フィスプに行くには、途中険しい山岳地帯が立ちほだかつていて道路が無く、鉄道のトンネルのみが唯一の交通路である。このためトンネルを挟む駅と駅との間は、車ごと列車に乗り込んで移動することになる。我々の乗る大型バスも、乗車したまま列車の荷台の上に乗っかってトンネルを通過してゆく。

フィスプからさらに南に谷沿いの道を遡って行くと、タッシュの町に到着する。車はここから先は乗り入れ禁止で、鉄道でツェルマットに入ることになる。

大きな荷物とともに列車に乗り込み出発する頃には、先ほどまで晴れ上がっていた空の雲行きが怪しくなり、ツェルマットの駅に到着したときには小雨がパラつきだした。ここからゴルナグラートに向かう登山電車に乗り換えるのだが、出発までしばらく時間があるので、駅前のコープで明日のお昼の行動食を仕入れる。駅前は小雨降りしき中、馬車と電気自動車があわただしく動いている。

登山鉄道GGBの乗り場より出発した電車は、ツェルマットの町を抜けると、急な勾配の線路をグングン登っていく。高度はどんどん上がっていくが電車の窓には雨の雫が流れ落ち、外の景色も白い雲と黒々とした木々のコントラストばかりが続く単調な車窓であった。

しかしそれは突然現れた。“マッターホルン”が目の前に飛び込んできたのだ。雲の合間からまるで我々を出迎えるかのようにその姿を現した。みんな急に色めき立ち、声とも言えない声を発しながら窓の外に釘付けになった。写真でしか見たことの無かったあの形が目の前にある。そして今まであたりを覆っていた分厚い雲が開けだし、つぎつぎとヴァリス・アルプスはその山容を現し始めた。ブライトホルン、リスカム、そしてモンテローザ。初対面なのになぜか旧知の山々のように映ってくる。

興奮がまだ覚めやらないうち、電車は終点のゴルナーグラートに到着する。駅を降りるとまた大騒ぎになった。掛布母を筆頭に女性達が、マッターホルンの雄大な展望を目の前にして、はしゃぎ回っている。「上の展望台に行けばもっと良く見えますよー」という中村さんの言葉に、ようやく気を落ち着かせ、「クルムホテル・ゴルナーグラート」に向かう。



マッターホルン(4, 478m)

このホテルは3,130mの地点にあり、ドーム型の天文台がある石造りの山岳ホテルだが、外観の要塞のようないかめしさからは想像がつかないくらい、内部は新しく“ウディ”な感じのホテルである。そして部屋に入り窓を開けてあっと驚く。マッターホルンが真正面に望むことが出来るからだ。アンティークな窓枠が“額”となって、まるで絵画を見ているような錯覚に陥る。

外はミズレらしいものが降ったようで、地面には白いものが見え、かなり冷え込んでいる。でもこんな素晴らしい景色を部屋の窓から眺めているのがもったいない気がして、外に出てホテルの上の展望台に行ってみると、やはり先客がいた。クマちゃんがカメラアングルを探しながらウロついている。しばらくすると他の親達もゾロゾロと展望台に上がってくる。

雨上がりのせいもあって、澄み切った空気がヴァリスの大パノラマをいっそう鮮烈に演出してくれる。マッターホルンの左手には、ゴルナー氷河から突き上げるモンテローザ、リスカム、カストール、ポリュックス、そしてブライトホルン。右に目を移してゆくと、ダン・ブランシュ、ヴァイスホルン。さらに右手遠くには、ドームをはじめとするミシャベル山群と呼ばれる高峰群が連なる。真後ろを振り

返ってみると、明日登頂予定のシュトックホルンに延びる稜線が続いている。

三浦さんが「こんなすごい景色を撮っていると、みんな名カメラマンになってしまうねえー。」としみじみつぶやいた。

この格別な景色に、もう一つおまけがついた。展望台のすぐ下を、普段はめったに近くで見ることが出来ない「シュタインボック」の群れが通過していったのだ。思わず「大きな角のダンナだー！」と叫びそうになった。



シュタインボック

ホテルの夕食も感動ものであった。レストランの壁一面の大きなガラス窓から、モンテローザ、ブライトホルンを眺めながら、豪華なディナーを楽しむことが出来る。「ハイジ」の名がつくワインが、雰囲気も手伝って、ボトルからあつという間になくなっていった。そして鮫島母のこの上ない幸せな顔がそこにあった。

シュトックホルンへ

8月8日(火) 晴／曇

何故か高いところにいると、早く目が覚める。部屋の窓をそーっと開けると、昨日と同じ三角形のシルエットが、まだ明けきっていない空にくっきりと浮かび上がっている。

しっかり着込んで、いそいそと展望台に行ってみる。陽はまだ昇っていないが、山々の4,000mより高い部分だけがすでに薔薇色に染まっている。そして東のシュトックホルンの稜線から陽が昇り始めると、この展望台はクライマックスを迎える。箕浦父も、三浦父も、そして私も、無言でビデオカメラを回す。ときおり深いため息をつきながら。

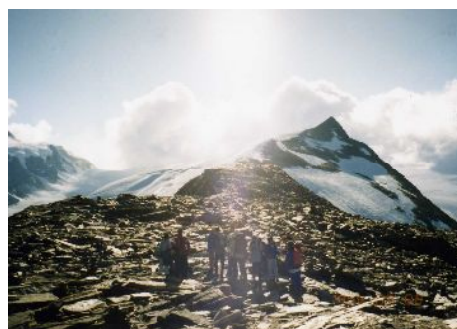


爽やかな気分の朝食のあと、登山の準備を済ませ、ホテルのすぐ下にあるロープウェイの駅に向かう。掛布父、みゆき、そして昨晚の「ハイジ」の飲みすぎか、高山病のせいかわからないが、頭痛を訴えた成田3名を残し、始発のゴンドラに乗る。

「峠の会」貸切のゴンドラは、左手下にフィンデルン氷河を見ながら高度を上げてゆく。中継の駅で一度乗り換え、標高 3,405mの終点に到着する。シュトックホルンへはガレ場と雪の道が続く。高く昇り始めた陽の光が雪に反射して眩しい。



ゴルナーグラートにて



シュトックホルンへ

約120mの高度差を40分かけて登る。頂上直下が少しきついが、9時過ぎに全員無事登頂。(3,533m) モンテローザから派生するフィンデルン氷河の上部が目の前に広がる。頂上はかなり狭い岩場のため、全員での記念撮影は無理ということで、とりあえずこの雄大な景色を目にしっかり焼き付けて早々に下山にかかる。下り道を歩きながら思ったが、こんな贅沢な稜線歩きは未だ経験したことがない。稜線の両側には二つの大氷河、それを挟んで左右には 4,000m級の名高い山々がそそり立ち、正面にはマッターホルン。短時間で下るには実にもったいない。

ゴンドラで再びゴルナーグラートへ。着いてびっくりは、今朝までの静けさとは打って違って、下から上がって来た観光客で、駅の周辺は大変な賑わいを見せている。それも大半が日本人だ。ヨーゼフとそっくりのモデル犬を中心して、記念写真を撮りまくっている。

そんな騒々しさを後にして、駅から下りの登山電車に乗り込む。最初の駅「ローテンボーデン」で途中下車し、駅の裏手を下って行くとリッフェルゼーに出る。この湖は“逆さまッターホルン”が美しいので有名だが、あいにく薄雲に包まれて、湖面に映し出された姿を見ることは出来なかった。

湖の左手にそそり立っているリッフェルホルンを見上げながら、花と緑の緩やかな登山道を下って行く。途中、別パーティーのハイカーが、「マーモット」らしい姿を見たらしく、立ち止まってその場所を見ているので、我々もしばらく付き合っていたが、結局あの可愛い姿を現してくれなかった。

リッフェルベルクの駅の傍にあるレストランのテラスで昼食にする。現地調達のインスタントフードも調理して食してみるが、やはり日本のものには及ばない。

駅から再び電車に乗り、リッフェルアルプに向かうが、その駅で下車せずにそのままツェルマットに下るものと、グリュンゼーを経てフィンデルン村からツェルマットへハイクで下るパーティーに分かれる。ハイキング組は、前田夫妻、箕浦父、三浦父、鮫島母、掛布母、私、それに中村さんの8名。小林マキちゃん「私、明日ブライトホルン頑張って登るから、今日はここでパース！」とって

電車に乗り込んでいった。

グリュンゼーの近くで「エーデルワイス」を見たという情報を数日前に得たので、結構期待して岩陰を注意しながら歩いたが、結局見つけることは出来なかった。湖(ゼー)からフィンデルン氷河の末端を眺めたあと、下りにかかる頃小雨がパラつき出す。氷河から流れ落ちる独特の白濁した水の流れに架かる橋を渡り、少し登り詰めて行くとフィンデルンの村に着く。そして村の入り口にあった小さくて小綺麗な茶店に入る。中は他のハイカーもいて満員で、肩を寄せ合いながら、各自注文した飲み物でのどを潤す。さすがにここには我々以外の日本人はいない。

小雨も上がり、樹林帯の中をツェルマツめざす。途中、「ネズミ返し」のある小屋を見ることが出来る。

4時過ぎに市内のホテル「ペレン」に到着。部屋で少しくつろぐ間もなく、奥さんと駅前のコープへ、明日の行動食の買出しに出かける。生鮮食料品や雑貨のほか、ちょっとしたお土産も揃っていて、お土産物専門店よりも少し安い。

<裏話その6>

ツェルマツのウェアショップにて。鮫島母、ディスプレイされてあるなかなか素敵な女性用ジャケットの前で、正礼とにらめっこしながら、かなり長い間考え込んでいた。その目の奥には、たった1人日本で今も働いている夫の姿が映し出されているようにも見えた。そして彼女は諦めたようにその場を離れた。

翌日たまたまそのお店をのぞいたら、それはすでになくなっていた。

結局誰かが買って行ってしまったのか...。あとで鮫島母にそのことを告げると、彼女は“モナリザの微笑み”を浮かべた。お土産いっぱい詰まったバッグを指差して。

ホテルでの夕食は相変わらず豪華なメニューだが、日本食が少し恋しくなる。

いよいよ明日は「ブライトホルン」登頂の日。部屋で準備を整え、早めにベッドに入る。

ブライトホルンへ

8月9日(水) 曇/晴

目が覚めるとすぐに窓を開ける。雨は降っていないが青空はない。暗くはないが霧のように真っ白な雲が空を覆っている。少し早めの朝食をとり、ハイキングパーティーと一緒にホテルを出る。(掛布母とみゆき、成田の3名は、ホテル滞在後、地下ケーブルでスネガーに昇り、マッターホルンの見物へ。)

ロープウェイの駅にはすでに3名のガイドの方が待っていて、中村さんから紹介を受ける。3人とも顔に髭をたくわえたプロガイドらしい面構えである。

ロープウェイの出発を待っている時に、県連理事長の洞井氏一行に遭遇する。マッターホルンを登りに来たようだ。

登頂の起点となるクライン(小さい)・マッターホルンへは3本のロープウェイを乗り継いで昇る。標高1,600mのツェルマツから一気に3,820mまで上がってしまう。ブライトホルンの真っ白な頂上

が目前に迫る最後のゴンドラが山頂駅に近づく頃、高度のせいかな軽い吐き気を感じる。

駅から長い真っすぐのトンネルを抜けると、そこはもう一面白銀の世界だ。目の前にはブライトホルンプラトーと呼ばれる広大な雪原が広がっている。そして下界から見えた白い雲はすでに眼下に広がり、上空を見上げればまさに“スイス晴れ”である。

登頂は3パーティー [① 小倉 Fa(父、母、千枝、穂高)、② 鮫島 Fa(母、暁、萌)+前田父、③ 箕浦 Fa(父、浩文)+小林]に分かれ、これに1名ずつガイドがつく。

我々(小倉 Fa)のパーティーには「ダン」という名のカナダ人ガイドがつく。彼は最近スイスに来たばかりだそうで、こちらでガイドをして稼ぎながら、自分の目的の山を楽しむ予定という。カナダには妻子を残してきているとのことで、我々のように家族で登山することに対して羨ましく感じたようで、しきりに「エキサイティング！」を連発していた。

各パーティーそれぞれ準備を終え、ザイルで結び合って出発にかかる。

ハイキングパーティーが盛んに声援を送る中、大プラトーの上をゆったりしたペースで歩いて行く。先頭は鮫島、前田パーティー。すぐ後に箕浦、小林パーティー。少し遅れて小倉パーティーの順で進む。昨夜降ったばかりの新雪を踏む音が心地よく響く。平坦なプラトーが延々と続く。歩いている方向の白い地平線上に、モンテローザ、リスカム、カストール、ポリュックスがそのピークをのぞかせている。トレースはやがて左に折れ、やや上がりの斜面になる。

早起きのせいかな、高度のせいかな、穂高が軽い頭痛を訴え、苦しそうな表情をしている。ダンがしきりに心配して、このまま行動して良いか尋ねるが、親はニッコリ微笑んで、「OK、ダイジョーブ、ノープロブレム」を繰り返す。ニッコリは日本人の悪い癖だが、内心は「息子よ、何とか頑張って歩いてちょ！」と悲痛な思いで歩いていた。小倉Faにとって、今回のスイスアルプスは、すべてこの日の為であったといっても大袈裟でなくらい、深い思い入れをしていた。この登頂に参加した子供達は、個人差はあるが、1年以上の期間をかけて、積雪期の岳沢、千畳敷、御岳、西穂独標でトレーニングを積んできた。特に穂高は全てをこなしてきた。(というよりも、親が勝手に引きずり回した?) 何とか家族全員で頂上に行きたい!!

そんな思いが通じたのか、バッファリンを一錠飲んでからは、見事に復活してしまった。そういえば「玉山」のときもそうであったが、彼は4,000mに限りなく近づくと“よみがえる”

しかし私はこの時、穂高以上に千枝がしんどい思いをしているのにほとんど気が付かなかった。(履きなれない靴にかなり痛い思いをしていたらしい。)

斜面がきつくなる手前で、全員アイゼンをつける。陽の照り返しがかなり強い。ガイドに促されて、小林“壁塗り”に精を出す。

急な斜面を少し登ると、そんなに広くはないが、底が見えないくらいの深いクレバスが、ぽっかりと口を開けている。アンザイレンしながら1人ずつ慎重に通過する。ルートは左手をトラヴァース気味に登って行くが、気温が高いせいかアイゼンがダンゴになり苦勞する。幾度となく見上げてもまだまだ続くトレースに、高度の影響もあるのか、気持ちも足も次第に重くなってくる。

途中、ツェルマットの最長老のガイド(95歳)がサポートするパーティーとすれ違う。

二つ目のクレバスを通過すると、ルートはやがて右に折れ、さらに急なトラヴァースとなる。ここ

が一番キツク感じた。私達のペースもこの付近からかなり落ちてくる。ダンはこのペースに合わせてしっかりサポートしてくれる。

そして上のほうから「頂上だよー」の声がとどく。はやる心を抑えて一步一步踏みしめながら登って行く。ふと気がつく足元に斜面がなくなっていた。「着いた...」しんがりの私が最後に足を踏み入れる。

11時35分 ブライトホルン 全員登頂！！

標高 4,164m。足元には、湧き上がる雲の間から高峰のみがその姿を見せる。360度さえぎるものは何もない。遠くフランスのモン・ブラン、グランドジョラスも望むことが出来る。

とにかく子供達に感謝。ここまでよく親のわがままに付き合い通してくれた。そして三人のガイドにも感謝。代わる代わる握手を交わす。感謝の言葉を伝えようと思ったが、なかなか思いつかず、やっと口から出てきたのは「I'm very happy！」であった。

全員で記念写真を撮る。「チーズ」はあまりにも日本的なので、「ブンダバー(素晴らしい!）」といったら、スイス人ガイドの1人が正しいドイツ語で「ヴンダヴァー！」と声を張り上げた。



ブライトホルン頂上(ガイドのダンと)

30分ほど頂上で過ごした後、下山を開始する。アイゼンにまわり付く雪を払いながら慎重に下って行く。千枝が疲れのピークと、靴の影響もあって、アイゼンをよく引っ掛ける。下部のクレバスを通過後、全員アイゼンを外す。そして再び長い平坦なプラトーを歩き、出発地点の近くでザイルを解く。「終わった...」スーツと安堵感が体を突き抜け、心地よい疲れに包まれる。そして今下りてきたばかりのブライトホルンのピークを振り返り、長い深呼吸をする。

ガイド達と再び感謝の握手を交わし、お礼に日本から準備してきた和風デザインのハンカチーフと日本の山の写真入りテレカをプレゼントする。

クライン・マッタホルンをあとにしてゴンドラに乗り込む。下りの途中、浩文と下山後はしゃぎすぎた穂高が、頭痛を再発しうずくまっている。その情けない姿を撮ろうとカメラを向けると、隣にいた萌がニッコリとピースサインを出す。(やはり玉山のときもこんな場面があった。) 女は強い！

<裏話その7>

ブライトホルン登頂の時、最初に頂上を踏んだパーティーのクマちゃん、いつもの調子で頂上に着くと、勝手に自分のザイルを外してカメラ片手にうろつき出す。そしたらガイドにしっかりお目玉くって、再びザイルに。

私が頂上に着いたら、そこにはザイルでつながれた“サル(クマ?)回し”状態のクマちゃんがおとなしくたたずんでいた。

そんなことでは懲りないクマちゃん下山のとき、ザイルにつながれたまま、雪玉作って子供達やマキちゃんにぶっつけている。そしたらまたガイドにおこられている。 — 懲りないクマちゃん —

我々がツェルマットに戻ろうとしている頃、ハイキングパーティーは、一つ下の駅からゴンドラでシュバルツゼーに上がり、マッターホルンを間近に見ながら、ツムツ村へ向かっていた。

ホテルに戻り一休みして、街に買い物に出かける。マッターホルンの初登頂者、ウィンパーが常宿にしていたホテル「モンテローザ」の前を通り教会の広場に出ると、観光客や登山者でごった返していた。買い物の帰り、山岳博物館をのぞいてみる。マッターホルンに挑んだ先人の記録や遺品は一見の価値がある。

ホテルでの夕食は、ブライトホルン全員登頂の快挙もあって、祝賀会的雰囲気ではまった。雪焼けで真っ黒になった子供達の笑顔がはじける。

しかし、ツェルマットも今日が最後で、スイスに来てからの時間が本当に早く感じてしまう。明日は山ともお別れである。

ベルンへ

8月10日(木) 晴

ベルンへの出発は午後のため、午前中はフリータイムとなる。女の子は親達と早朝からケーブルカーでスネガーへ、男子はつるんでホテルや街中をうろつく。

私達夫婦は子供達に見捨てられ、二人でツェルマットの街中を名残惜しみながら歩き回る。穂高は担任の先生のお土産を必死に探し回っていたが、結局指輪を選んで買って来たようだ。しかし言葉の通じない店で、子供達だけでちゃんと買い物をしてくるのには感心してしまう。

昼過ぎに駅前に全員集合し、電車に乗り込む。タッシュにはすでにチャーターバスが待っていて、お土産のいっぱい詰まった荷物を積み込み出発する。バスの中では早速お土産の品評会が始まった。

往路と同じ道を戻り、バスごと列車に乗るカートレインで峠を越え、トゥーン湖畔に出る。ここから左に折れ、しばらく湖の景色を右手に見た後、アーレー川沿いに北上してベルンに向かう。

4時ごろにベルン市内に入る。さすがに人や車の数は多くなるが、“古都”という名にふさわしく落ち着いた街で、中世ヨーロッパを感じさせる建物が立ち並ぶ。ホテル「メトロポール」でチェックインを済ませ、早速みんな街の見物に出かける。所々に史跡や名所が点在し、たまたま通りかかった「からくり時計」で有名な教会の前で、5時の時刻を待っている大勢の観光客に出くわし、我々

もその中に加わる。どんなからくりが飛び出すか結構期待して待っていたが、始まってみると以外にあっけなく終わってしまった。

ベルンは、アーケードの街としても有名で、建物の1階の道路側はほとんどアーケードになっていて、いろんな店のウィンドショッピングが楽しめる。わりと高級品店が多く、財布の口はなかなか開かなかった。

男の子達は、ホテルの近くおもちゃ屋を早速見つけ、色々物色している。イタリア製のフェラーリのモデルカーに人気集中しているようだ。

今日8月10日は、実は穂高の誕生日で、中村さんに前日、バースデーケーキをお願いしたところ、ケーキはアルパイン社の好意で準備していただき、さらにホテルからはお祝いにワインをサービスしていただいた。毎年誕生日はほとんど山の中の穂高にとって、久々のまともな誕生パーティーであった。



穂高の誕生パーティー



ホテルからのベルンの街並み

再びチューリッヒへ

8月11日(金) 晴

「部屋の窓を開けても、そこには山々の姿がなかった...」その時のハイジの気持ちが分かる気がした。

まだ7時前なのに、ベルンの街はすでに動き出している。部屋のバスルームでEPIを取り出し、農協米をあつため、ふりかけとインスタント赤だしの朝食を穂高と2人で食らいつく。ホテルの朝食はバイキング式なので、コーヒーとヨーグルトだけで済みます。こんなパターンがここ数日前から続いている。

チェックアウトを済ませ、ホテル前からチャーターバスに乗り込む。市外を抜け一路チューリッヒに向かう。窓の外の景色も、ときおり近代的な建物が目に入ってくるようになる。

午前中にチューリッヒ空港に着く。荷物の検査を受け出国カウンターに向かう。中村さんともここでお別れだが、彼はこの後、すぐ次の日本からのツアーパーティーの受け入れなどもあって、しば

らく日本に帰れないそうだ。大変な仕事だが、内心羨ましい。

空港内の免税店でなどで少し買い物をしたあと、搭乗手続きを済ませ待合室に入る。そして三浦 FA とはここでお別れとなる。ガラス越し見る少し寂しそうなカン君の顔と、目を真っ赤にした三浦母の顔を見ると、胸が詰まりそうになる。

待合室の窓から、我々より少し早く飛び立った、三浦 FA のシカゴ行きの SWISS AIR を見送る。

13時40分チューリッヒ発。長い長いフライトがまた始まった。しかし同乗したポルトガルの学生（ユニバーシアード大会に参加するバレーボールの選手らしい）の行儀の悪さには閉口した。

帰国

8月12日(土) 雨／曇

せまいシートでの浅い眠りから目が覚め、機内食が配られる頃、飛行機の機体が、にわかに揺れが大きくなってきた。香港まであとわずかだが、天候が下り坂になっているようだ。カップの飲み物がこぼれてテーブルをぬらす。そして空港に着陸態勢に入ったとき、我々は恐怖の体験を受けることになる。今までいい思いをしてきたツゲが最後の最後に回ってきた訳でもないが、「台風」通過中の空港に飛行機は突っ込んでいったのだ。窓の外にビルの窓がはっきり確認できる高度から、機体がガクッと落ちる。「ヒヤーツ！！」と思わず口走った直後、再び機体は下からあおられたように浮上する。機内のあちこちで悲鳴が聞こえてくる。そしてようやく体勢を立て直して、機体を震わせながら滑走路に無事着陸する。機内は拍手と歓声に包まれるが、私はすでに抜け殻の状態であった。

香港では市内観光のためバスをチャーターしていたが、台風のためバスの外に出ることが出来ず、シャッターを閉め切った繁華街と、道路に散らばる木の枝を眺めながら、唯一営業している市内の免税店に向かった。小倉家はここで「痩せる石鹸」を購入するが、いったい誰が使うのだろう。

<裏話その8>

恐怖体験後の香港の空港にて。そこには非常に気まずい雰囲気立ち込めていた。
スワツ！！ “成田離婚”ならぬ “香港離婚”か！
箕浦父が述懐する。「思いやりのつもりで言ったのに、そう受け取ってもらえなかった...。」
— 詳しい内容は本人まで —

空港に戻り各自昼食を済ませる。台風のため飛行機が飛ぶかどうか案じられたが、定刻より少し遅れ、何とか離陸することが出来た。途中、懐かしの台北(中正機場)に寄り、日本に向かう。

名古屋の街の灯りが見え出した頃、ようやく日本を実感する。

人影もやや少なくなった空港には、鮫島父と松田さん夫妻が迎えに来てくれていた。

10日間の思い出とお土産がいっぱい詰まったバッグを肩に、各自我が家に向かう。

Auf Wiedersehen !

<裏話 LAST>

掛布ファミリーはみゆきちゃん不調のため、何かと大変なスイス行きではあったが、母に劣らず父もかなりの感動屋さんで(内に秘めた)、行く先々で感動しまくり、極まるどころ、自宅の部屋の窓を「クルムホテル・ゴルナーグラート」に改造してしまった。

おしまい。